

校種間ギャップの克服  
～幼保小連携と、小中連携～

現在、幼児教育では、『遊び保育』が盛んに行われています。幼児期においては“遊び”と“学び”の区別はなく、“遊び”の中から主体的な“学び”を得るという考え方です。よくよく考えるとそうだなと思うのですが、義務教育に長く携わっていると、学ぶことと遊ぶことは反対の関係にあると思いがちです。改めて、教育というものの深さを感じます。

“遊び”は“主体的”です。だから“楽しい”のです。同時に“楽しむすべ”も身に付けるのです。それがそのまま“主体的な学び”となるのです。ここに根本的なものがあるような気がします。

数年前、私が参観したある幼稚園の公開授業発表は、まさしく『遊び保育』の時間でした。子供たちは、思い思いの場所で、思い思いの“遊び”をしていました。土を掘ってトンネルをつくる子供たちもいれば、池の中で何やら捕る子供たちもいます。かたや教室の中で段ボールの家を作って遊ぶ子供たちや、友達とままごと遊びをする子供たちなど、それぞれ好きな“遊び”をしていました。とても楽しそうに、また自慢げに生き生きと活動していました。

私は、懸命に遊んでいるある子どもに「楽しそうだね。何作ってるの？」と声を掛けました。するとその子はうれしそうに「これはね～～～」と話してくれました。思わずこちらも楽しくなる時間でした。ところが、ふと顔を挙げて壁に貼ってある紙を見て驚きました。そこには『子供たちには声かけをしないでください』と書いてあったのです。「しまった！」子供たちの“遊び”は“学び”であり、それを大人が邪魔してはいけないのでした。反省しました。

一方、先生たちは何をしていたのかというと、子供たちの様子をじっと観察して個々の子供の動きを一生懸命にメモしていました。

もちろん、そういう状態ですから喧嘩も起きました。その時には、先生が仲裁に入って子供たちの話をよく聞いていました。あくまでも子供たち自身に考えさせながらの指導だと感じました。

先生方は子供たちが帰った後で、個々の子供に対する観察記録を共有し合い、子供の成長と課題を明らかにして、明日の準備をしているということでした。このような指導が、“主体的な学び”を創っているのだと感心しました。

さて、このようにして育った子供たちが小学校に入ると、雰囲気が一変します。小学校には小学校の“やり方”があり、集団規律を学ばせながら、1時間1時間の授業がきっちりと行われます。教師は、慣れない子供たちを一生懸命に指導します。するとそこに大きな課題が待ち受けます。それは、『小1プロブレム』や『不登校』等の課題です。

その解決のために、幼保小の連携の大切さが叫ばれ、現在、幼児教育の最終年と小学校1学年をつなぐ『架け橋プログラム』の作成等が行われています。

山梨大学の犬野歩教授の講演会で、動画を見させていただきました。その動画には、幼稚園時代、『遊び保育』で生き生きしていた子供が、小学校に入った途端、教室の椅子にのけぞったように座り、先生の授業をほとんど聞けず、だら～としている様子が映し出されていました。教授はその動画を見た後、「幼児教育も小学校教育も、共に一生懸命に取り組んでいる。その上で、理想論ではなく、現実問題にどう対応したらよいのかということを考える必要があります」とおっしゃって、「一案ですが」と断っ

た後、「小学校の低学年で行う『生活科』の時間を活用して、小1の最初の時期には幼稚園でやってきたような遊びと学びを一緒にしたようなカリキュラムを組んでみたらどうでしょうか」と提案されました。他の教科はそのままよいので、『生活科』の一定期間だけ幼稚園の延長で行ったかどうか、という提案でした。具体的で実効性のあるものだ、私は思いました。

同じような課題は、小学校から中学校へ上がる時にも生じます。基本的に学級担任制である小学校時代から、教科担任制である中学校生活への環境の変化を、激変と感じる子供たちも多いでしょう。中学生になって新たに不登校になる生徒も急増します。『中1ギャップ』という言葉も生まれています。

私は、小学校の教壇に立った経験はありませんが、指導主事時代、小学校の国語教育を担当しましたので、県下の相当数の小学校を訪問させていただきました。そこで強く感じたのは、小学校は中学校とは違った教育方針を持ち、子供たちへの対応の仕方もかなり違っているということでした。

中でも一番強く感じたのは、小学校の先生方の子供たちに対する極めて“丁寧な”指導です。もちろん発達段階の違いもあるのですが、それにしても一つ一つのことを実に丁寧に指導します。例えば、小学校には『ことばのものさし』というものがあり、話をする相手の状況に応じた音量で話すという教育が行われています。相手の人数に合わせて、また場所の大きさに合わせて、距離感も含めて、適切な声量で話しましょうという指導です。ともすると中学校では、教師ですら狭い教室に10人程度しか生徒がいない時に、非常に大声で話すことも珍しくありません。小学校で声量の指導をしていることを知ら

ない中学校の教員も多いのではないのでしょうか。

そこでまずは、異校種間でお互いに観察することから始めてはどうでしょうか。その基本的なスタンスは、“褒め合う”ということです。“認め合う”と言ってもいいかもしれません。相手のよいところを見て学ぶという姿勢が大事だと思います。そして良い面を伝え合うこと、そこからスタートすることが何より大事だと思います。

ただよく聞かれるのは、お互い忙し過ぎてゆっくり参観する余裕がない、という声です。しかしそれを言うばかりでは、何も解決しません。時間は“つくる”ものだと思います。異校種間交流というと何か行事を仕組むとか、研究会を持つとか、負担感のありそうなアイデアが浮かびますが、もう少し軽く考えてもいいのではないかと思います。工夫次第で継続的な交流が出来るはずです。

異校種間の相互理解が進むことで、学ぶ子供たちはどんなにか楽になることでしょう。それが“学びが楽しい”、さらに“主体的な学び”につながっていくのではないのでしょうか。将来、『小1プロブレム』や『中1ギャップ』という言葉がなくなっていくことを、心から願ってやみません。

(市川三郷町教育長 渡井 渡)

